

グローバル・クラスルーム

報告書

2019 年度高校模擬国連国際大会への第 13 回日本代表団派遣支援事業





目次

はじめに（理事長挨拶）	2
団体紹介（グローバル・クラスルーム日本委員会）	3
事業概要	5
派遣報告	7
参加者報告	
アドバイザー	12
大会写真	16
派遣生	17
支援団体一覧	33
日本航空株式会社(JAL)からのメッセージ	37
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）	38



はじめに（理事長挨拶）

この度、高校模擬国連国際大会への13回目の日本代表団派遣支援事業の報告書をみなさまにお届けできる運びとなりました。本事業にご後援いただいた関係省庁・団体、ご協賛、ご協力いただいた企業・法人等、多くの皆様からの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業は2018年11月17-18日に東京の国連大学で行われた第12回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を取めた8校16名の高校生が、日本代表団として国際大会に参加するというものです。今回、日本代表団はデンマーク王国の大使として世界中の高校生が集まる舞台上、できる限りの準備をして会議に臨みました。

今回の派遣支援事業において派遣生は皆、持てる力を総動員して世界に挑戦しました。世界中の高校生たちと議論を交わす中でうまくいくこともあれば思い通りにいかないこともあったはずですが。そうして世界の広さを肌で感じることは、自分の能力や将来について考えだす大きなきっかけとなったのではないのでしょうか。派遣生が今回の派遣を「スタートライン」として捉え、新たな未来への一歩を踏み出すことを心より願っております。

最後に、本書が多くの人に読まれ、日本における高校模擬国連活動のさらなる普及と発展の一助になることを期待しております。今後とも、グローバル・クラスルーム日本委員会へのご支援・ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本委員会
2019年度 理事長 田邊 雄斗



団体紹介（グローバル・クラスルーム日本委員会）

グローバル・クラスルーム日本委員会は、高校模擬国連活動の普及と発展を目指し、全日本大会の開催及び国際大会への派遣支援活動を行う団体です。私たちは、以下の理念に基づいてこれらの活動を行なっています。

「国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進するとともに、豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出する。」

2007年、グローバル・クラスルーム日本委員会が日本で初めて高校模擬国連国際大会への日本代表団の派遣支援を行ったことから、日本の高校模擬国連活動が本格的にスタートしました。それ以降、全日本高校模擬国連大会を毎年開催し、優秀な成果を残した生徒の高校模擬国連国際大会への派遣支援を続けています。なお、2012年より公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターと事業を共催しております。

会員

アドバイザー(敬称略)

特別顧問 明石 康

公益財団法人京都国際会館理事長／元国連事務次長

役員(敬称略・順不同)

議長 星野 俊也

日本模擬国連 OB／国際連合日本政府代表部大使・次席常駐代表

紀谷 昌彦

日本模擬国連 OB／外務省 中東アフリカ局アフリカ部・国際協力局参事官

中満 泉

日本模擬国連 OG／国連事務次長および国連軍縮担当上級代表

柿岡 俊一

埼玉県立浦和西高等学校教諭

竹林 和彦

早稲田実業学校教諭

米山 宏

公文国際学園中高等部教諭

理事会(敬称略・順不同)

理事長 田邊 雄斗

東京大学法学部第1類3年

研究主任 鴛海 晶

東京大学法学部第2類3年

広報主任 二木 恵

早稲田大学創造理工学部経営システム工学科 3年

事務主任 児玉 大河

慶應義塾大学法学部政治学科 3年

研究 荒井 ひかり

上智大学経済学部経済学科 2年

研究 井原 渉

東京大学前期教養学部理科一類 2年

二木 浩司

東京大学工学部航空宇宙工学科 3年

伊藤 駿介

明治大学政治経済学部政治学科 2年

小寺 圭吾

早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科 2年

小塚 慶太郎

立教大学経営学部経営学科 2年

谷本 莉子

慶應義塾大学文学部人文社会学科倫理学専攻 2年

小牧 薫子

東京大学前期教養学部文科一類 1年

渡邊 玲央

東京大学前期教養学部文科三類 1年

石本 達也

東京大学工学部化学システム工学科 3年



第13回日本代表団に随行したグローバル・クラスルーム日本委員会のメンバー



事業概要

【企画名称】

2019 年度高校模擬国連国際大会への第 13 回日本代表団派遣支援事業

【主催】

グローバル・クラスルーム日本委員会 (JCGC)
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

【日程】

2019 年 4 月 14 日 (日) Information Session
2019 年 5 月 7 日 (火) ～ 5 月 13 日 (月) 高校模擬国連国際大会
2019 年 6 月 23 日 (日) 報告会

【開催場所】

アメリカ合衆国ニューヨーク市 Grand Hyatt New York、United Nations General Assembly
東京都新宿区 JICA 地球ひろば国際会議場

【内容】

米国国連協会の主催により開催される高校模擬国連国際大会 (Global Classrooms International High School Model United Nations Conference) に、グローバル・クラスルーム日本委員会主催の第 12 回全日本高校模擬国連大会にて選出された高校生が日本代表団として参加するための派遣支援事業である。同大会には世界 13 か国以上から総勢約 1500 名の高校生が参加した。

【参加者】

1) 日本代表団 (16 名)

浅野高等学校 成相 悠喬、持松 進之介
麻布高等学校 松田 新、吉川 駿
海陽中等教育学校 安藤 憲佑、伊藤 康陽
岐阜県立岐阜高等学校 辻 諒汰、山下 倫未
渋谷教育学園幕張高等学校 荒竹 ゆりな、頓所 凜花
聖心女子学院高等科 小林 りこ、山内 梨々花
桐蔭学園中等教育学校 西田 翔、袴田 英希
灘高等学校 古賀 大陸、藤川 直人

2) 引率教員 (8 名)

上田 直広 (浅野高等学校)
中野 靖英 (麻布高等学校)
梅田 浩樹 (海陽中等教育学校)

澤田 宏（岐阜県立岐阜高等学校）
齊藤 智晃（渋谷教育学園幕張高等学校）
大山 江理子（聖心女子学院高等科）
新井田 真樹（桐蔭学園中等教育学校）
宮田 幸一良（灘高等学校）

3) グローバル・クラスルーム日本委員会（4名）

研究主任 鴛海 晶（東京大学法学部第2類3年）
研究 荒井 ひかり（上智大学経済学部経済学科2年）
研究 井原 渉（東京大学前期教養学部理科一類2年）
理事 小寺 圭吾（早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科2年）

4) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（1名）

国際教育交流部 岡野 晃一



2019年度高校模擬国連国際大会への第13回日本代表団
（於：Grand Hyatt New York）



派遣報告

派遣日程

- 4月14日(日) Information Session
- 5月7日(火) 日本出発、ニューヨーク到着
- 5月8日(水) 国際労働機関(ILO)・デンマーク政府代表部・国際連合児童基金 (UNICEF) 訪問
- 5月9日(木) 日本政府代表部・UN Women 訪問
- 5月10日(金) 高校模擬国連国際大会 会議1日目
- 5月11日(土) 高校模擬国連国際大会 会議2日目、高校模擬国連国際大会 閉会式
- 5月12日(日) ニューヨーク出発
- 5月13日(月) 日本帰国
- 6月23日(日) 報告会

参加会議

学校名	生徒名	担当会議	議題
浅野高等学校	成相 悠喬 持松 進之介	International Monetary Fund (IMF)	Emergence of Cryptocurrencies in the Global Financial Market
麻布高等学校	松田 新 吉川 駿	International Maritime Organization (IMO)	Securing Strategic Straits
海陽中等教育学校	安藤憲佑 伊藤 康陽	International Committee of the Red Cross (ICRC)	Ensuring Humane Treatment of Detainees
岐阜県立岐阜高等学校	辻 諒汰 山下 倫未	World Bank (WB)	Improving Global Social Security Systems
渋谷教育学園幕張高等学校	荒竹 ゆりな 頓所 凜花	General Assembly 3 rd Committee (GA3)	Developing a Global Approach to the Integration of the Disabled
聖心女子学院高等科	小林 りこ 山内 梨々花	World Trade Organization (WTO)	The Role Intellectual Property in Inclusive Global Trade
桐蔭学園中等教育学校	西田 翔 袴田 英希	International Fund for Agricultural Development (IFAD)	Discussing the Possibility of Mass-Organic Sustainable Farming
灘高等学校	古賀 大陸 藤川 直人	World Health Organization (WHO)	Mechanisms of Controlling Epidemics in Global Mass Gatherings

《 Information Session 》

JICA 地球ひろばの国際会議場にて、渡米前の説明会及び政策発表会を行いました。JCGC 役員や ACCU 進藤部長による激励の言葉を受け、派遣生たちは国際大会が目前まで迫っていることを改めて認識し、決意を新たにしました。

政策発表会では、担当国であるデンマーク王国の大使として、担当会議ごとに設定された議題について自分たちの政策を英語で発表しました。派遣生たちは、外務省よりお越しいただいた川上様、およびグローバル・クラスルーム日本委員会研究



OBOG、全日本高校模擬国連大会フロント OBOG の方からのフィードバックに加え、JCGC 役員の先生からのアドバイス、派遣生同士での質疑応答を通じて担当会議・議題についての理解を深めました。

また午後には、派遣生たちは英語を駆使して話し合い、親睦を深めると同時に、自分たちのスキルアップに努めました。今年度も過去の国際大会派遣生が多く集まり、派遣生たちは様々なアドバイスを受けるなどして有意義な時間を過ごしました。

(小寺)

《 国際労働機関 (ILO) 》



ニューヨーク 2 日目に国際労働機関 (ILO) を表敬訪問しました。今年で設立 100 周年を迎える ILO がこれまで国際社会で果たしてきた役割に始まり、情報技術の革新による雇用形態の変容、そして現在直面している課題などについて拝聴しました。

ILO の会議は、社会との対話を通じて実情にあった議論を進めやすくするために、各国から政府代表・労働者代表・使用者代表のからなる三者構成をとっています。この制度は国連機関で ILO のみが採用しているという説明を聞き、急速に変化する社会において実態と需要への対応を如何なる場面においてもすべきであると思いました。ILO への表敬訪問は、これからの労働を担う我々が将来の課題に関して議論を交わし、労働に関する問題を当事者として再認する契機となりました。また、事務所を訪問し現職の国連職員の方とお話したことにより、知見を広げるのみでなく国連機関の雰囲気などを肌で感じる事ができ、とても有意義な経験ができました。

(伊藤・安藤)

《デンマーク政府代表部》

デンマーク政府代表部では、内政方針、外交方針双方について話を聞かせていただきました。

まず内政方針として、デンマークは国民の幸福度が高いことで知られている通り、国民を第一に考えたうえで、政府と国民との信頼関係を重視しているというお話を伺いました。国民の生活に直結する技術などの活用に熱心な点にデンマーク政府の立場が現れていました。

次に外交方針として、デンマークはEUやNATOの加盟国であることから、同じ枠組みとの協力を最重要視していることを知りました。それらに加えて、さまざまなフィールドで先進国と呼ばれるデンマークは、他国、特に発展途上国との対等な関係における協力にも熱心でした。

概して、デンマークは、国民に対してデンマークらしさを出していく一方で、世界の中でのデンマークとして他国と協力していく立場を取っていることを学びました。世界各国がともに発展していくことを切に願っているデンマークの代表部の方の様子がとても印象的でした。

(持松)



《国際連合児童基金（UNICEF）》



聞きしました。

また、お話の途中でリフレッシュのためのダンスタイムを設けてくださり、派遣生、大学生、引率教員含め全員が最後まで楽しくお話を伺っておりました。表敬訪問が終わるころには、職員の方々の情熱に感銘を受け、インターンなどの形でUNICEFに協力したいと言っている派遣生もいました。

UNICEFでの時間は私たち派遣生にとって、実際のUNICEFの活動や世界の現状についての理解を深め、自分たちにできる貢献の形を考える良い機会でした。今後の派遣生の人生の糧となると思います。

(松田)

《日本政府代表部》

日本政府代表部では国際政治や国連についてとても興味深いお話を想像以上に分かりやすく伺うことができました。日本の大使として国連の現場で働いている方から、国際社会における日本の立場や歴史について直接お聞きした内容は、臨場感と迫りに満ちており、これまで私がインターネットや本から得ていた情報が、実は表面的なものであったことに気がつきました。

具体的内容としては国際社会における日本の立場から政策を検討し、他国への提案と議論を進めていく一連の流れについてお話を伺いました。模擬国連ではペアと2人で作業を行いますが、実際の国連では政府のスタッフ、特に外務省の方々を中心に大掛かりなチームで遂行していることを学びました。国連大使は自国の代表者として大きな責任を担っていることから、一つ一つの発言や表現法を常に慎重に扱っていると知り、私たちが臨む模擬国連にも応用できる有効な交渉術だと思いました。また対応してくださった星野大使自身、模擬国連の経験者という事で、教育活動としての模擬国連をとっても高く評価していらっしゃいました。

(頓所)



《UN Women》



UN Women でははじめに、SDGs の目標5「ジェンダー平等と女性のエンパワーメント」と他のSDGs の目標との関わりおよび政治・経済・保健等あらゆる分野においてジェンダーの視点を取り入れる重要性について伺いました。

その後、日本がジェンダー平等・女性のエンパワーメントのためにUN Women と協力して行っている政策や、UN Women の職員から見た日本の現状について2016年発効の女性活躍推進法等、日本政府の政策も交えつつ話してくださいました。日本の

女性の社会進出は数値的には改善がみられると伺ってもまだ体感的に改善を感じられない派遣生が多く、本問題の根の深さと社会の根本的な価値観を変える難しさを感じました。さらに、HeForSheについてのお話を通して、男女平等社会の実現は男女間の対立を深めるものではなく双方にとって過ごしやすい持続可能な社会の形成が目的であり、ゆえに男女間における問題意識の共有および男性の参画が極めて重要だと伺いました。

この訪問をきっかけに派遣生同士でもジェンダー平等と女性のエンパワーメントについて様々な意見が交わされました。日本人の同年代の高校生同士でも感じることはそれぞれに異なり、大変有意義な経験となりました。

(古賀)

派遣生



(於：国際連合ビル前)

受賞

本年度、日本代表団は1校が受賞しました。

【優秀賞 (Honorable Mention Award)】

渋谷教育学園幕張高等学校…国際連合総会第3委員会 (GA3)

議題：Developing a Global Approach to the Integration of the Disabled



荒竹 ゆりなさん (左側) と 頓所 凜花さん (右側)



参加者報告（アドバイザー）

小寺 圭吾

早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科 2 年
グローバル・クラスルーム日本委員会 理事

初めに、今年度も無事に高校模擬国連国際大会への日本代表団派遣支援事業を開催できたことを大変嬉しく思っております。これもひとえに日頃よりお世話になっております協賛企業・後援・支援者の皆様を始め、本事業に参加いただいた引率教員・生徒のみなさま、運営関係者の皆様のご協力のおかげに他なりません。本当にありがとうございます。

本事業への同行にあたり、私は「派遣生が輝ける環境を作る」を目標に定めておりました。派遣生の会議への熱意については全く心配しておらず、ただ努力の成果を存分に発揮し楽しんで欲しい。それが私の思いでした。そのためにグローバル・クラスルーム日本委員会の理事として渡米前はもちろん渡米中も表敬訪問先との連絡や高校模擬国連国際大会本部との連絡を取るなどして派遣生にとって最善の環境作りに務めてまいりました。



そして今回の派遣支援事業は日程に恵まれ、5 つの場所へ表敬訪問をさせていただきました。実際の国際社会で活躍されている方々から直接お話を伺うことができ、改めて表敬訪問も派遣支援事業のとても重要なものであるということを思いました。印象に残ったのは、ほとんどが英語でのお話にも関わらず、派遣生はすぐに適応し、また、ただお話を受け入れるのではなく、表敬訪問後、派遣生通しでの議論が絶えなかった点もとても印象に残っております。英語でインプットした情報を各々ですぐにアウトプットすることに楽しさを感じていたようでした。

迎えた会議当日、派遣生は死力を尽くしていました。ニューヨークに滞在するたった 1 週間のために高校生活の全てを費やしてきたその熱意が彼らを大きく成長させたことでしょう。彼らの人生の転機となる濃密な 1 週間をともに過ごせたこと、彼らが間違いなく世界のリーダーに彼らが近づいた瞬間をともに過ごすことができ、私自身も大変誇らしく感じております。今後も派遣生が各々の目標に向かって歩みを止めることなく羽ばたいていくことを心から願い応援しております。

また、繰り返しにはなりますが、派遣支援事業にご協力いただきました諸団体の皆様、ならびにグローバル・クラスルーム日本委員会に関わってくださった全ての方々へ深く御礼申し上げます。今後ともグローバル・クラスルーム日本委員会へのご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

鴛海 晶

東京大学法学部第2類3年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究主任



初めに、今回の派遣支援事業にご支援ご協力賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

私は今回の派遣支援事業におきまして、準備から当日に至るまで、一連の会議サポートの役割で派遣生と関わってまいりました。その立場から国際大会を振り返らせていただきます。

半年間関わってきて感じた、派遣生たちの最大の魅力は常に今できる最善の行動を考えそれに向かって進む力を持っていることでした。

派遣生たちは11月に渡米が決定してから5月の渡米まで約半年間かけて自らが参加する会議の議題や担当国であるデンマークの立場について綿密なリサーチを行い、政策を立案し、自らの政策の伝え方や議場での動きを考え、会議に向けて入念な準備を重ねてきました。政策や自国の立場を考えるにあたって求められる知識レベルが高かったり議題自体が新しく資料が見つげづらかったりと、様々な困難がある中で派遣生たちは書籍や論文、各機関のウェブサイトなど様々なものを駆使してリサーチを行ってきました。中には自ら議題に精通した方にブリーフィングをお願いして議題理解に努めている派遣生もいました。そのようにして得た知識レベルは各議場でも随一のものでした。

そして迎えた会議当日にも派遣生たちの持つ魅力は発揮されていました。国際大会は会議形式や議場の雰囲気や日本の会議とは大きく異なるため、戸惑う様子も見られましたが、その中で派遣生たちは自分たちの強みや準備を生かして、現状を分析し、それをどう変えられるのか最善の策を常に考えて動いていました。午前中にうまくいかなかったことを午後に、1日目の失敗を2日目に改善する術を模索し、日本とは全く異なる強みを持つ人たちと会議をする2日間は派遣生らにとって良い刺激となったことでしょう。

2日間の会議が終わり、派遣生たちの多くはその表情に悔しさを滲ませていました。多くの派遣生たちにとっては最後の会議となる今回の国際大会において目標を十分に達成することができた人は少なかったはずですが、しかし、派遣生たちは前進するための確かな力を持っています。彼ら・彼女らなら今回の会議で自らが達成できなかったことをしっかり見つめ、今できる最善のことを考えて次の目標に向かって進んでいくことができると信じています。派遣支援事業という一つの機会において派遣生が得た経験が今後どのように花開くか楽しみにしております。

最後に、今回の派遣支援事業にご支援ご協力賜りました皆様に改めて感謝を申し上げますとともに今後のグローバル・クラスルーム日本委員会にご厚誼賜りますよう、よろしく願いいたします。

荒井 ひかり

上智大学経済学部経済学科2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究

はじめに、平素より本委員会の活動にご賛同・ご支援・ご協力いただいているすべての皆様に厚く御礼申し上げます。今回私は、グローバル・クラスルーム日本委員会の研究という立場として、会議サポートに主眼を置いて今回の派遣支援に携わらせていただきました。

今回の国際大会に派遣生はデンマーク大使として臨みました。半年にわたり会議の準備を進め、リサーチを徹底的に行い、政策を考え抜いてきました。派遣生の国際大会への熱意がこの長期間の会議準備及び会議本番を強く支えたと思います。



会議本番では、会議進行方法の違いや参加者の雰囲気の違い、言語の壁など、様々な日本の模擬国連会議との違いに直面し、多くの派遣生が戸惑いを感じました。しかし置かれた難しい状況の中で、力強く花を咲かそうと全ての派遣生が全力を尽くしました。常に状況を分析し、「自分たちはデンマーク大使として何ができるのか」を考え、試行錯誤しながらも諦めずに最後まで会議と向き合う派遣生の姿はとても頼もしかったです。

会議を終えて、思うようにできて自信につながったこともあれば、思うようにいかず不本意に感じていることや新たに見つけた自分の課題も各々あると思います。自信は自分を支える糧に、そして大いなる可能性である不本意に感じていることや新たな課題は、自分の肥やしにして、今後も貪欲に成長し続けてほしいです。

また、今回の派遣において、派遣生から「ペアへの感謝の気持ち」を度々聞きました。何か1つの大きなことに誰かとペアを組んで臨む、というのは大人でも難しいです。ですが高校生である派遣生たちが、性格や強みなどが異なる中、互いの高い能力を相乗的に高め合い、足りないところを補い合い、1人ではなくペアであることで互いの力を最大化できていました。この誰かと1つのことをやり遂げた経験と信頼のおけるペアの存在は、今後派遣生たちが困難に直面した際、大きな支えとなると思います。新たな気づきや様々な経験、ペアの存在など、今回の派遣を経て得た多くのことを踏まえ、将来どのような活躍をしていくのか、派遣生たちのこれからがとても楽しみです。

私は来年度の派遣支援事業にも研究として携わらせていただきます。今回の派遣支援事業で得た知識や経験を活かし、来年度の派遣生により適切なサポートを提供できるよう尽力してまいります。この派遣支援事業は、派遣生自身の今後に、そして次の代以降の派遣生に大きく繋がる事業であると思います。その繋ぐ役目をしっかりと果たせるよう、精進してまいります。

最後に繰り返しになりますが、今回の派遣 支援事業を支えてくださった方々に、グローバル・クラスルーム日本委員会の一員として厚く御礼を申し上げ、私からの報告を終わらせていただきます。

井原 渉

東京大学前期教養学部理科一類2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究



はじめに、本派遣支援事業にご支援ご協力を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

このたび私は研究として主に派遣生の会議サポートに関わってまいりました。この国際大会派遣支援事業は私がグローバル・クラスルーム日本委員会 研究として取り組む初めての大きな事業でしたが、多くの方々の支えのおかげで無事に自分の職務を果たし日本に帰ってこることができました。この場を借りて感謝を申し上げます。

今回渡米した派遣生は昨年11月に開催された全日本高校模擬国連大会を勝ち上がった高校生たちです。もともと同世代の生徒たちと比べて飛びぬけて優秀な彼らに、グローバル・クラスルーム日本委員会は、そして研究である私は派遣支援事業を通して何を与えることができるのか。常に自問自答しながらサポートを続けてきました。

今回、派遣生は全員がデンマーク大使を担当し、ほぼ半年にわたって各自の議題に対する政策を考えてきました。知識の収集、そして政策立案という過程は日本での模擬国連活動でも経験していると思いますが、研究のサポートを受けながら何度も政策を吟味する過程や Information Session で多くの人に政策を発表する経験は派遣支援事業ならではのものではないでしょうか。またニューヨークでは実際に自分たちが担当するデンマーク政府代表部の方のお話を伺い、自国のスタンスを見つめなおすこともできました。普段の模擬国連生活では得られない多くの経験を与えること、これが派遣支援事業の持つ一つの意義であると感じました。

しかし経験ということでは国際大会本番に勝るものはないと思います。派遣生たちはこの日に向けて入念に準備し会議戦略を立ててきましたが、中にはそれが思ったように機能せず苦勞する人も見受けられました。国内の模擬国連活動では経験したことのない初めての挫折という派遣生もいたのではないのでしょうか。しかし派遣生たちはそこで諦めることなく戦略を柔軟に切り替え、議論にそして交渉に、積極的に向かっていきました。国際大会という場で悩み、それを乗り越えた経験は将来グローバルリーダーとして活躍するにあたって必ず大きな意味を持つものになると思います。会議後ホテルのロビーで世界各国の大使と談笑する派遣生の姿はそれを確信させるものでした。

私は来年度も派遣支援事業に同行する予定でおります。今回の派遣支援事業で得た経験を、今後研究として高校模擬国連に携わっていく中で常に心の中に留め置き、特に来年の派遣支援事業で高校生たちにより適切なサポートを提供できるように、自らのスキルアップをはじめ自分にできることを実行していきます。



大会写真





参加者報告（派遣生）

『世界大会で得たもの』

成相 悠喬

浅野高等学校 2年

The Secretary General Award goes to Portugal.

この言葉を聞いた時、すべてが終わったと感じました。何のために、約半年間もリサーチをしてきたのか。何のために、この大会に来たのか。しかし、そんな気持ちで国連本部を去ろうとしていたときに優秀賞をとった大使に声をかけられました。

「デンマークが最優秀賞をとると思ったよ。政策がクリエイティブでユニークだし、会議中も目立っていたから。」その言葉を聞いた時、自分が何をこの派遣事業の目標としていたか、思い出されました。自分自身の限界に挑戦し、世界でどこまでやっていけるのか試してみたい。これがこの派遣事業の目標でした。

ここからは、自分が立てた目標に関連付けながら世界大会を振り返りたいと思います。約半年間、模擬国連のことで頭がいっぱいで、夜遅くまでリサーチをしていました。仮想通貨についての資料や報告書が少なく、リサーチが難航し、またデンマークの国益が自分の中で明確になっていなかったため、政策が春休みの最終週まで決まりませんでした。春休み中は、自分の能力のなさ日々格闘していました。大きな紙にリサーチしたことを列挙し、気になったことを検索していました。先輩には、いつかきっといい政策が思いつくから頑張れと声をかけてもらい、その言葉を信じて頑張りました。その結果、Regulatory Sandbox という政策に出会いました。この政策に対する自信は会議中も優位に働きました。つらかったリサーチを乗り越えたときの達成感は今でも忘れません。

そして、いざ世界大会と思い、乗り込んだ会議序盤、誰にも自分たちの話を理解してもらえず、自分たちのグループは自国含めてまさかの2か国になってしまい、最悪の出だしでした。顧問とペアと自分とで寂しい昼食を食べた際、顧問からうまくいったら夕飯はクラムチャウダーだぞと言われ、気合を入れ直しました。自分たちの持ち味である「粘り強さ」「自信」「泥臭い努力」を最大限に生かし、交渉に交渉を重ねました。そうしたら、あるグループが自分たちの政策に賛成してくれ、コンバイン（異なるグループが一つのグループに結合すること）しました。これが好機となって、グループは一気に大きくなり、グループの雰囲気も良くなりました。

最後まであきらめずに自分たちのやってきたことを信じた結果、最後にはグループリーダーになり、DR（成果文書：Draft Resolution）も提出することができました。しかし、これは決して自分たちだけでできたことではなく、最初から最後まで一緒に頑張った大使たち、途中で自分たちの政策に賛同してくれてコンバインし、その後共に頑張った大使たちがいなければできませんでした。改めて仲間の大切さを学びました。

最後になりますが、このような貴重な経験を体験できたのは、多くの人の支えがあったからこそだと思っています。グローバル・クラスルームの皆様、ACCUの皆様、顧問の先生方、同じ派遣生の仲間たち、浅野のみんな、そして今まで出会ったすべての模擬こっかーのみんなに感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



『それぞれの世界というフィールド』

持松 進之介

浅野高等学校 2年

今年はラグビーワールドカップ（ラグビーW杯）が日本で開催される。その年に、僕はMUNワールドカップ（MUN W杯）（高校模擬国連国際大会）に出場できるなんて、なんて僕は恵まれているのだ。ラグビーW杯に出場する選手たちは、ラグビー人生をかけて全力で試合に臨む。そして、“ベテラン”は、ラグビー人生の集大成として臨むことも少なくない。僕にとってのMUN W杯は、まさに高校模擬国連人生の集大成だった。「人生」という言葉を使うと照れ臭くなってしまうが、とにかく最後だった。



最後が国際大会だった。最初で最後の国際大会だった。楽しかった。やりきった。そして、悔しかった。心の中では、泣いていた。目に見える成果が欲しかったから。

ラグビーW杯に出場する選手たちは、選ばれし者たちばかりだ。同じポジションのライバルたちを蹴落として出場切符を勝ち取る。そして、いざ試合となるとその蹴落としたライバルの分まで全力を尽くして戦う責任とプレッシャーがある。僕にとってのMUN W杯でも、全く同じ状況だった。たくさんの高校生が全力を出すために東京にやってきて、全日本大会に臨んだ。その大会で、選ばれし者の1組僕たちだった。全日本大会で最後まで共にやり抜いた仲間たちの思いを背負う責任を負い、国際大会に出場されることが求められた。だが、それは僕にとってはすごく嬉しいことだった。仲間の分まで頑張れるチャンスを頂けたから。

ラグビーと模擬国連、共通点はまだある。ラグビーW杯に出場する選手たちは、レフェリーとのコミュニケーションを英語で行わなければならない。レフェリーとの意思疎通が重要視されるラグビーの試合では英語は必須だ。僕にとってのMUN W杯では、その壁は拭いきれなかった。普段使わない言語をいくら練習しても、ネイティブの使用量には勝てない。英語力で勝るはずはないから、内容と戦術と一つ一つのプレーで戦うことにした。色々と想像と違うことがあり、歯が立たなかったことが多かったが、最後まで粘り強く、そして自分たちで分析もしながら最後までプレーを続けた。ノーサイドを知らせる木槌の音が鳴るまで。MUNは勝ち負けじゃないっていうけれど、勝ちたかったから。

ラグビーW杯に出場する選手たちは、W杯前の合宿期間中時間を共に過ごし、試合後は仲間のプレーを互いにたたえ、反省する。仲間と過ごした濃密な時間は、一生忘れられない絆を育む。僕にとってのMUN W杯は、まさにそうだった。選ばれし16人が全国から集まり、はじめは知らない人もいながら、最終的には友情、絆を育む。そして、共に戦い、互いを労う。この派遣がなかったら会わなかったような人とも、素晴らしい時間と経験を共有できる。そんな1週間は、たったの1週間だったけれど、僕たちの人生に確実に大きな影響を与えてくれた。一生に一度の、素晴らしい仲間と過ごした経験だったから。

色々な人に支えられ、仲間たちと刺激しあい、最後には、結果に感情を持つ。そして、その感情を今後いかし、自分の人生を築きあげていく。高校生のうちからこんなことに気づかせていただけるなんて、思ってもみなかった。皆さん、ありがとうございました。

『模擬国連で多くを得た』

松田 新

麻布高等学校3年



初めに、以下に記すような、そして記しきれないような貴重で濃密で最高の経験を僕にさせてくださったスポンサーの方々、模擬国連関係者の方々、先生方、親に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。僕はこの半年間の経験を生かして、さらに学びを深め、社会に貢献する人材になります。以下に、僕が半年間の模擬国連活動を通して経験したこと、得たこと、考えたこと、思ったことを、活動の段階ごとに概説します。

1、書類選考

書類選考を通して自分は、課題図書で議論されている「水」の問題や気候問題の理解が深まったばかりでなく、計画性や問題解決能力が身についたと思います。ですが何よりも、ペアの吉川と力を合わせて部活、勉強、模擬国連を楽しみつくした夏は、最高の思い出になりました。

2、会議準備

会議準備の初めにリサーチをしました。模擬国連のリサーチでは正しい情報を日本語、英語ともに駆使して集める必要があり、さらにそれらを時間内にまとめなくてはなりません。ですから、文献の信頼性にこだわること、計画性、英語力など、今後の学習に役立つスキルが身につきました。また、政策立案においてはペアの吉川の発想力に驚かされることが度々で、2人で政策を考えると楽しく、生産的な議論となりました。この経験を通して僕は人に頼ることの重要性を学んだうえ、政策立案をする職業に憧れるようにもなりました。

3、本番の会議

本番の会議では、海外の高校生のディスカッションの能力に驚くことが多くありました。彼らの一部は熱心なリサーチや政策立案はもちろん、話す技術に長けていました。特に同議場で最優秀賞をとった大使は、堂々とした公衆演説、議論の集約、求心力が非常に優れていたため、学ぶところが多く、強い刺激を受けました。また、自分の英語力の未熟さを再認識し、今後の英語学習のモチベーションが上がりました。

4、表敬訪問、ニューヨーク観光など

表敬訪問では、UNICEF や国連日本政府代表部をなどの機関でお話を頂戴しました。特に UNICEF の方々のお話は、自分が思い描く理想の教育像と重なる部分が大きかったうえ、職員の方々の情熱を感じ、感銘を受けました。そして、大学生になったら、UNICEF でインターンをさせていただきたいとも思いました。

『刺激に満ちた一週間』

吉川 駿

麻布高等学校 3年

高1の夏、たった1週間かけて準備した全日本大会の書類選考で落選してから早1年半、こうして派遣事業の報告文を書かせていただいていることが未だに信じられないような気持ちがあります。そんな僕が、模擬国連や今回の派遣事業に参加した中で感じたことを記したいと思います。

模擬国連を通して、数え切れないほどの高校生と議論を交わしました。そこでまず感じたのは、彼らの言葉や、会議内での行動からにじみ出る「熱」でした。特に、初参加の全日本大会で出会った大使たちを見て、同年代の高校生が国際問題についていかに真剣に考えているかを思い知った時の衝撃は凄まじかったです。彼らの膨大な知識量に、国際大会ではより一層、周到な準備をしなければ、と身が引き締まる思いがしたのを今でも覚えています。そうして挑んだ国際大会でまたしても多くの海外の高校生と出会ったわけですが、あくまで真摯な会議姿勢を貫こうとする日本の高校生とは少し異なり、議場の中でいかに存在感を示し、会議に貢献できるかということを国際大会の大使は重要視していたように思います。彼らの気持ちの込められた熱弁に気圧される場面もありましたが、そこで一步を踏み出して議論の輪の中に飛び込み、刺激し合えたことは素晴らしい経験になりました。

刺激を受けたのは会議のみにとどまりませんでした。滞在中に国際機関を訪問し、職員の皆さんのお話を直接お聞きすることができたのは、二度とない貴重な機会でしたし、空き時間にはニューヨークの街を散策し、飛び込んでくる多種多様な光景を目に焼き付けながら、世界の中心とも言える都市の雰囲気を感じることができました。他の派遣メンバーとの交流もとてもいい思い出です。全日本大会ではある意味ライバル同士であった16人が同じ国の大使として国際大会に臨むことには一種の感慨を覚えましたし、一緒に過ごす中で、時に雑談をし、時に真剣に意見を交換したり、励まし合ったりしながら国際大会を乗り越えた心強い仲間になりました。

僕の模擬国連生活は新たなものとの出会いの連続であったと感じています。最後に、派遣事業に際してサポートして下さった先生方、支援団体の皆様、JCGCの皆様へ改めて深い感謝を申し上げます。そして、二人三脚で頑張ってきたペアの松田にこの場をお借りして特段の感謝を述べさせていただきます、この報告文を締めくくりたいと思います。



『安藤憲佑と模擬国連』

安藤 憲佑

海陽中等教育学校 3年

模擬国連がどれだけ私を成長させたことだろう！

安藤少年が高校 1 年生の時には、先輩に誘われるがままに参加した模擬国連が彼の人生を塗り替える事になるだろうとは微量にも考えておりませんでした。人見知りで、集団の前で話すことはおろか、グループワークをするのが大の苦手だった私は 2 年後にニューヨークへ代表団の一員として派遣されるほどまでになりました。なお、派遣されたからといって慢心しているわけではなく、未だに未熟なところばかりですが、ただ以前と比べると大きな成長をしたと申し上げたいのです。本報告書ではニューヨークまでの模擬国連が私に及ぼした影響について書き連ねさせて戴きます。



初めての大会から模擬国連の面白さに惹かれ沢山の練習会議を経験しました。この頃、模擬国連はまだ趣味の程度であったことは特筆すべきことです。初めての全国大会では大使として未だ熟しておらず、結果は残せませんでした。その後、無念な思いと海陽学園初のニューヨーク出場を目指す思いに押され、本腰を入れた目標が出来たのは高校 2 年生の夏以降でありました。初めは気楽にやっていた会議で失敗に失敗を重ね、いつしか本気になっていた自分に気づき、今までにここまで本気になれたものは（同時期に気持ちを入れていた部活と並んで）他にないと思い、一層大会への気持ちが強くなりました。ペアとの協力の結果、審査員特別賞を受賞し派遣団の一員に加わることができたのはとても嬉しく、また私にかつてない達成感をもたらしました。

国際大会においては、多大な労力と時間をかけて準備をしたのにも関わらず結果を残せなかったのは悔しく思いますが、それよりも学ぶことが多かったので満足しています。本大会は日本での会議と比べ、様々な点において違いがありました。アンモデの様子、DR の内容、大使の雰囲気は特に印象に残っています。このような日本とは異なる世界で、外国語で戦ったことこそが自分のプライドとなり、一生残るであろうことは疑いようがありません。同時に、この違いを事前によく理解できていたらと考えることもあります。自分達の準備の仕方には改善すべき点があり、14 期以降の派遣生にはこのことをできる限り正確に伝えなければならないと思うに至りました。

誇りについて前述いたしましたでしたが、最後に特筆すべきなのは派遣されたことを背負って生きていくということは決してそれに慢心することではなく、派遣団という誇りを維持できるように、そしてそれを超える為に弛まぬ努力をするべきであるということです。

以上のことを胸に刻み、経験や学びを忘れずに人生を歩んでいく所存であります。

『模擬国連は本当に面白い！』

伊藤 康陽

海陽中等教育学校 3年



2年間の高校模擬国連の活動を終えた今の私の心の中の純粋な気持ちです。

実際のところ、ニューヨークでの会議は満足いく結果とはなりませんでした。初日、モデ（公式討議：Moderated Caucus）の連発で飛び交う英語にどう対応したらいいかわからず、想定していた方向性に会議を進めることもできず、アンモデ（非公式討議：Unmoderated Caucus）に突入しました。アンモデでのグループ

形成には大方成功し、2グループのコンバインに貢献することはできたものの、肝心の自分の政策はすんなり流されてしまい、DRの提出国となることはできませんでした。今会議の1つの目標としていた受賞を逃してしまった点に関しては悔んでも悔やみきれません。しかし、そんな中でもニューヨークの国際大会に参加することで確信できたことがあります。模擬国連の「面白さ」です。

ニューヨークの大会を含め、今まで参加してきた会議で常に意識してきたことは「大使になりきる」ことでした。今までの会議を振り返るときに果たして自分は本当に「大使になりきる」ことができたのかと常々自分に問い続けてきました。今回のニューヨークでの大会で感じたことは、それぞれの描く「理想の大使像」は一人ひとり大きく異なるということです。アメリカ人が演じる「デンマーク大使」や日本人が演じる「デンマーク大使」はあくまでそれぞれの価値観の入り混じった「大使像」であり、完璧に「大使になりきる」ことは非常に困難です。そのような中でも偏見を振り払い、理想の「大使像」を徹底的に考え抜き、まったく知らない異国の人間とシンパシーを感じながらその人間を会議で演じ切る、その過程こそが模擬国連が僕を魅了し続けてやまない「面白さ」なのではないかと痛感しました。

また、この「面白さ」に気づくことができたのは、何よりも常に支えてくれるペアの安藤のおかげです。性格から考え方まで何もかも正反対の僕たちは、準備の段階ではぶつかり合いや喧嘩を繰り返しながらも、互いの求める「大使像」を形作り続けました。自分の準備不足や実力不足から国際大会で安藤と賞をとることができなかったことは本当に悔やまれますが、これまで1年間ペアとして模擬国連の「面白さ」を共有することができたことを心の底から感謝しています。

東海地方の僕たちにとって模擬国連はあって当たり前のものではありません。高校模擬国連の活動は地方ではほとんど知られていないのが現実です。こんなに「面白い」活動が一部の人たちの間にとどまっているのは勿体ないです。47都道府県の高校生の誰もが模擬国連を知り、楽しめ、高めあえるよう高校模擬国連のコミュニティが日本中に広がることを切に願います。

最後になりますが、このような素晴らしい経験をさせていただいたグローバル・クラスルーム日本委員会の皆様、ACCUの皆様、海陽学園の先生方や仲間、家族、ペアの安藤、今回の派遣事業にお力添えいただいたすべての方々に感謝申し上げます、僕の報告とさせていただきたいと思います。

本当にありがとうございました！

『「悔しさ」と「感謝」』

辻 諒汰

岐阜県立岐阜高等学校3年

「悔しさ」と「感謝」、これは僕が国際大会を通して特に強く感じた2つの感情です。

まずは1つ目の悔しさ、僕たちは全日本大会の時からずっと事前準備の綿密さが何よりの強みでした。しかし国際大会に向けてのリサーチは今までのどの会議よりも複雑で困難なものでした。上手くいかないことばかりでやめたいと思ったときも少なくありません。それでも「日本代表の一員として」という矜持を胸に、日本の模擬国連を背負うからには絶対に妥協したくないという思いでリサーチに全力で取り組みました。そして迎えた2日間の会議、僕はこの日噛みしめた悔しさを今後も絶対に忘れません。終了を告げる木槌の音が鳴った時、ただ「悔しい、悔しい」そう思っていました。自分たちのスタンスを述べ、自国の政策をWPに盛り込めたこと、ペアと議場の進展を予測して会議に参加できたこと、成果もたくさんありました。しかし、それ以上に日本の会議との違いや高すぎる言語の壁に圧倒されることのほうが多かったというのが正直な感想です。特に2日目、初日に作り上げたWPをコンバインしていた時、早すぎる議論の中で、僕はほとんど意見できず、頷くことしかできずにいたのです。「もしもこの会議が日本語だったら…」「あんなにリサーチしたのになんでその成果を発揮しきれないのだろう…」会議を終えた直後はそんな自責の念に駆られていました。ですが帰国した後、その悔しさから「言語関係なく自分の意見を堂々と表現できるようになる」という新たな目標ができたこと、自分の進路に新たな可能性を見つけたことは間違いなく国際大会を、そしてこの悔しさを通して掴み取った財産です。



そして2つ目に感謝、そもそも僕が模擬国連に関わり始めたのは高校2年生からで、その理由も「国際情勢に興味があったから」そんなちっぽけなものでした。当時はまさか自分がこの国際大会に参加することができるなんて想像もしていませんでしたし、今でも自分の力だけでは絶対にここまで成長しなかったと思っています。僕がここまで模擬国連に没頭できたこと、経験が少なかつたにもかかわらず日本代表として国際大会に参加できるレベルにまで到達できたのは、僕たちを励まし支えてくれ、時には厳しく僕たちの政策に意見をぶつけてくれた岐阜高校の模擬国連の仲間や先生方、僕たちの政策がより良いものになるよういつも真摯に向き合ってくださったサポートの大学生の方々、議場こそ違えど共に国際大会に参加した第13期派遣団メンバー、そして何よりどんな時も全力で邁進し、共にここまで歩んできたペアの山下さん、そういった何十、何百人という方たちと互いに研鑽し、協力できたからだと確信しています。「国際大会までの歩みの中でかけがえのない仲間たちと関わったこと」「誰よりも周りの仲間に恵まれる才能があることに気付かせてくれたこと」これらも間違いなく自分の中で今後も一生消えることのない大きな財産です。最後に、僕にとって国際大会での経験はどの瞬間も他の何にも代えがたい最高の宝物です。今後も会議中に味わった「悔しさ」と最後まで支えてくださった方たちへの「感謝」の気持ちを胸に、この先の将来、自分がなるべき理想像に近づけるよう日々精進していこうと思っています。自分にここまで貴重な体験をさせてくれた沢山の方たちにこの場を借りて「感謝」の意を表したいと思います、本当にありがとうございました。

『悔しさを糧にして』

山下 倫未

岐阜県立岐阜高等学校 3年



高校1年生の秋に、面白そうだと思って始めた模擬国連。その年の全日本大会を見学して初めて模擬国連とはどういうものか知った自分が、まさか国際大会に出場できるとは当時夢にも思っていませんでした。

学校初の派遣事業参加ということもあり準備から大変でしたが、入念なりサーチを心掛けました。まず私が驚いたのは、4月に行われたインフォメーション・セッション (IS) です。政

策説明から質疑応答まですべて英語で行うという貴重な経験でした。政策の課題点が明確になり渡米への心づもりもできた、非常に刺激的な時間でした。ISを踏まえて政策を練り直し、綿密に会議行動を計画しました。英語で話すことに慣れていなかったのも、会議中に使える英文も作成しておきました。

しかし会議初日は、最初の私のスピーチが響かず、議場は議題の大枠をとらえる前に細かい政策を議論する場となりました。グループに向けて政策を主張しようとしても、何人も人の話を遮って話をはじめ、思うようにいきませんでした。さらに周囲に圧倒されて消極的になってしまい、外交の役割を果たすことができませんでした。それでも WP (作業文書: Working Paper) に自国の政策をすべて書き込めたのは成果と言えると思います。

1日目のやるせなさをばねに、2日目は議場把握に精一杯努めました。ペア間連携も改善され、政策を他国とのコンバインという形で DR に反映させることに成功しました。なんとか国益を守ってデンマーク大使を務められたと思います。

今回の経験はまず、周囲の英語の堪能さに圧倒され、人生で一番言語の壁に苦しみ、悔しい思いをしたものでした。同時に、日本とアメリカの模擬国連の違いを学び、日本人以外の方々と会議を行えた大変貴重なものでした。改めて模擬国連の楽しさと奥深さを感じられ、人生に大きな影響を与えるものであったと確信しています。

私たちの高校は、都市圏にあるわけでもなく、模擬国連活動が盛んな地域にあるわけでもありません。今回、地方創生枠として選んでいただけたことを大変嬉しく思います。これからは「地方創生枠」であることに満足せず、この経験を用いながら学校の活動を活性化させ、将来的には模擬国連全体の発展に寄与できるよう努めて参ります。そして最後に、渡米にあたり応援をしてくださった先生方、模擬国連活動に理解を示してくれた剣道部の皆さん、同級生や両親、派遣決定時から会議最終日まで親身に、丁寧にサポートをしてくださった JCGC の皆さま、そして最後までペアとして活動してくれた辻くんに、感謝の意を表します。本当にありがとうございました。



模擬国連とは何か。私にとって原点に立ち返らせてくれた会議、それが国際大会でした。大使の人種や文化、会議に対する意識などすべてが異なる中で1つの会議を作り上げることは滅多に経験できることではなく、非常に学びのある会議となりました。そもそも日本で開催される模擬国連会議と本国際大会の形式は大きく異なり、会議の進め方から意見のまとめ方や政策の作り方において戸惑いもありました。しかしながらその違いが、国際大会

でしか味わうことのできない有意義さであり、それを私は楽しむことができました。

今会議で「持続可能な有機農業の可能性」を話し合う中で、私たちは誰よりも「未来を強く見据えることができた」と考えています。議場で2つの大きな対立する意見がある中で、現状と理想を見つめれば「対立ではなく両立」を目指す必要があり、それを確信していたからこそ、自信を持って2日間一貫して同じ主張を繰り返していました。ですが、意見をまとめ発信することは十分にできませんでした。もちろん英語力不足という側面もありましたが、会議に圧倒されてしまったことも大きな要因でした。

「自分がいることで会議のレベルが高くなるような存在に」。これが私の会議における目標です。模擬国連を初めた昨年4月より殆ど変わっていない自分への誓いとして日々活動しています。今までも幾度となく困難に苛まれ、その度に自分と向き合い葛藤し、今日まで成長してきました。ですが今回の会議では、今まで以上にその目標を達成できませんでした。今までの会議と比較し、その根本原因は事前の会議行動に対する準備不足であると導き出しました。日本の会議ではそう大きな議論レベルの相違は起こらないため、私たちは今までの経験の上で今会議の予測を描いてしまったのです。実際の会議では日本の会議ほど綺麗なまとまりを見せず、私たちの想定を超えた議論・議事進行が多く見られました。これはまた、自分自身に柔軟な対応力がないことの証左でもありました。この気付きは次の1歩への大きな課題となりました。

本事業に参加するにあたって、私は「今回の経験をいかにして日本にいる仲間に伝えるか」を強く考えていました。今年度高校2年生として国際大会に参加できたことには、私にはあと1年弱の継承期間が残されていることを示します。今回の派遣を通して得られた「日本の会議にはない国際大会の要素」というものは日本の高校模擬国連に良い影響を与えると考えています。そのため、今回の派遣事業で得た国際大会の良さを全力で伝えていきたいと思います。最後になりましたが、このような素晴らしい本事業をサポートして下さいました全ての方に感謝申し上げます。

『異質な空間から学ぶ際に共通すること』

袴田 英希

桐蔭学園中等教育学校 3年

“自分のいない会議より、いる会議の方が素敵なものになっている”これが模擬国連を始めた頃から一貫して追い求めていた目標でした。今回の国際大会は残念ながら完全に満足のいく2日間ではなかったものの、目標には一番近づけた会議だったと感じています。

会議開始直後からルールの違いや英語の速さに衝撃を覚え、中々ペースが作れませんでした。私達が最初から主張し続けた“各国が目指すゴールは同じはず”というメッセージはグループの柱となり、議場全体にも広がりました。その結果、各国の意見に大きな対立はなくなり、最後には途上国と先進国双方の意見が採用される運びとなりました。このように主張・政策面では会議に変化をもたらすことが出来たと信じています。

一方で、会議行動は軌道に乗りませんでした。先述のメッセージも最初に私達が言っていたときは見向きもされず、認めてもらえたのは他の大使の雄弁な説明のお陰でした。また、グループ内では飛び交う斬新な政策の数々を把握しきれず、議論をまとめることができなかつた上、会議の中で徐々に議論から外れる大使が生まれていることを認識しながら、有効な手が打てませんでした。日本では自分が得意としていたことがことごとく上手く行かず、もっと良い会議に出来たのではないかという悔いが残ってしまいました。

日本の模擬国連の強みである“国際情勢を理解し、それに沿った主張や政策を持ち込む”という部分は国際大会で発揮できたものの、それをもとに会議全体を動かすことは叶わなかつたことが大きな心残りです。

正直な所、会議を通して幾度も「英語さえ出来れば…」と悩みました。今考えれば、悩んだところで英語が出来ない事実は変わりませんし、仮に多少英語のスキルが高かつたとしても、英語を母国語とする人になれないことは明らかです。この差を埋めるためには、英語以外で自分の持つ武器を磨き上げなければならなかつたのだと、痛感しました。

今回の反省は「なぜ成功したのか本当には分かつていないとき、往々にして次は失敗する」という言葉に集約されます。成功したときに反省点を見つけることも大事ですが、それと同時に、なぜ上手くいったのかを検討し、確固たる武器にしなければならぬのだと気づくことが出来ました。国際大会は、日本で得たことを更に磨き上げ、言葉も文化も異なる世界中の人々相手に披露することが求められている、またとない機会でした。

今回の派遣を通して達成したことを、賞という明確な形で表すことが出来ないことは心残りではありますが、経験を次代の高校生に伝えていきたいと思っています。私にとって今回の会議は模擬国連生活の集大成であり、もう高校模擬国連の議場に立つことはありません。だからこそ、この派遣で得たものを、模擬国連以外の場で生かしていきます。

このような学びの機会を支えてくださった全ての方々に深く感謝しております。本当にありがとうございました。



『A Pool of Dark Self Thoughts and How I Got Out of It』

頓所 凜花

渋谷教育学園幕張高等学校 3年



会議当日の朝。私はその瞬間初めて緊張感が湧きました。実際に会議場に到着するまで夢の舞台に来たという事をあり得ないことのように感じていたのです。

私は、模擬国連を始めた頃はほぼ空気のような存在の大使でしたが、やがて失敗と成功、そして反省を繰り返しながら、少しずつ実力がついてきたことを実感するようになりました。私は模擬国連に対する強い熱意と、目標を諦めない信念があったからこそ、今いる

所に到達できたと思います。

全日本大会が終わった直後は達成感に満ち溢れていましたが、振り返ってみるとこの時はまだ自分の未熟さに気づいていませんでした。国際大会の雰囲気や一連の流れは、事前に聞いていても現場に着くまで実感が湧かず、日本の模擬国連と違う価値観のもとでの会議進行で私の思考は停止していました。模擬国連の活動において自身が基準としていたものが崩れ落ちた気がしました。周りのスピーチに耳を傾けつつも、私は葛藤に追われていました。しかし、ここで凹んで諦めてしまったら取り戻しがつかないと考え、気持ちを切り替える努力をしました。その結果、幸いにも私は平常心を取り戻し、グループのリーダーとなる事が出来ました。

自分のペースがつかめた後も、いかにも賞を狙っているような大使が現れ、スムーズな議論を乱しかねない状況がありました。こんな時でも、私は努めて冷静さを保ち、折り合いをつけ、皆が平等に発言できるような雰囲気を作るように心がけました。初日の後半には思うような議論ができたとはいえ、当初1日目の夜には自身の初動の悪さと刺激の多さによって疲れ果て憂鬱な気持ちでいっぱいでした。しかしそんな時に救いになったのが、理事の大学生の一言でした。彼は過去の派遣生も2日目で挽回したと励ましてくれました。この一言で、私は今まで自分が辛い時も諦めなかった事を思い出し、自分が模擬国連に取り組んでいる意味、そしてもうない一度きりのチャンスだということを再認識しました。こうして気持ちを取り戻してからは、2日目に備えて準備を完璧にしました。

会議2日目。前日とは打って変わって、モデも積極的に提案し、議場の流れを自分たちの方向に持っていくことが出来るようになりました。日本で鍛えた交渉力でコンバインも乗り切ると、気付かないうちに自然とDR提出国になっていました。周りの大使からの信頼を受けていたのだと思います。議長からフロントに呼ばれ、私たちの政策やグループのまとめ方を褒められるなど嬉しい事が多かったです。

模擬国連には、戦略を立てて自分やグループに優位になるように議論を進めるというゲーム的な面白さと、実際の国連大使になりきって交渉する実務的な面白さがあります。大会でありながらも、世界中の高校生と議論をする中で、多様な論点や政策が提案され、建設的な議論を重ねることによって、私の視野は確実に世界へと広がりました。また同時に、自分にとっての今後の課題も見つけることが出来ました。

今回の派遣参加を通じて、今までにも増して他人への感謝の気持ちを抱くようになりました。これほど充実した訪問や大会の結果を得られたのは、私には見えない所でのサポートや応援があったお陰だと確信しております。最後になりますが、支えて下さった皆様に心から感謝いたします。

『“Model United Nations”の意味に立ち返って』

荒竹 ゆりな

渋谷教育学園幕張高等学校3年

この報告書の主な読者は、来年度以降の国際大会を目指して模擬国連に取り組んでいる高校生でしょうから、その方々に向けて私の国際大会での学びについて記していこうと思います。私の拙い筆を以てして全てが伝わるかはわかりませんが、この文章を通して、たくさんの方々のご支援をいただき得られた貴重な経験を、少しでも還元できましたら幸甚に存じます。

物事の変化を語るには、前後の状態を知ることが不可欠ですから、まずは、渡米以前に私が考えていた模擬国連における理想的な大使の在り方について語ります。実際の国連決議の文言は「まあ、そうだよね」と感じるものが多いです。誤解のないように述べておきますと、立場に相違のある加盟国がこの内容で合意に至るまでに、大使の方々の多大な努力があり、1つ1つの文言が重みを持つこと、国際社会が統一見解を打ち出すことの重要性は十分理解しております。私が言いたいのは、模擬国連の会議で大使を演じる高校生が提案する具体的な政策と実際の決議の文言の内容には乖離があるということです。既存の枠組みにとらわれず、高校生らしい柔軟な発想から生まれたアイデアを提示するのか、それとも徹底して過去の自国の大使の行動をなぞるのかという葛藤が常に私の中にありました。もちろん、模擬国連には徹夜での交渉も、ロビー活動も、政府本部とのやりとりもありませんから、後者の追求には限界があります。しかし、「模擬」国連というくらいですから、実際の国連での話し合いになるべく近づけていくべきであるという一応の結論を出して、会議に参加してきました。

そして、全日本大会を通過して迎えた国際大会で参加したのは、国連総会第三委員会、議題は”Developing a Global Approach to the Integration of the Disabled”です。そこで強く実感したのは「教育活動」としての模擬国連でした。勿論、日本でも模擬国連は教育活動として位置づけられていますが、私は、例えるならサッカー部の子がサッカーをするように、どれだけ本物の大使に近づくかという「競技」と捉えている節がありました。具体的には、完成度が高く説得力のあるスピーチ、相手に Yes と言わせる交渉術、実現性があり効果的な政策の提言などが重要であると考えておりました。国際大会でこれらの点が評価されなかったわけではありません。しかし、それ以上に重視されていたのが参加者全員で議論を行うこと、また、それを可能にする“diplomatic”な姿勢のリーダーでした。わざわざ多くの高校生が集まって模擬国連を行う根底の理由に立ち返れば、これは当たり前のことかもしれません。スピーチ力や交渉力、政策提言力は、極論を言えば、一人あるいは数人で練習すれば身につけられるものです。しかし、ある議題について様々な立場を持つ人が話し合うことは、大使が一堂に会する模擬国連の場でしか行えません。国際的な事柄について問題意識を共有し、多角的な視点を持ちつつ解決方法を模索できる人材の育成を模擬国連が目的としているのならば、全大使を巻き込んだ話し合いが重視されるのは当然の帰結です。また、そのような議論には実際の担当国の大使をなぞることだけでなく、新たな自分らしい発想も必要となってきます。つまり、模擬国連においてこの二点は相反しないのですから、私が以前から抱いていた葛藤は解決される(というよりは実は存在しないはずであった)のです。

今大会全体のテーマは持続可能な開発目標だったのですが、まさにその理念である「誰一人取り残さない」議場が求められていました。“Model”United Nations が国連の「模擬」だけでなく「模範」となりうることを、高校生活最後の会議でようやく実感することになったのでした。



『「世界」で No one will be left behind を実行するために』

小林 りこ

聖心女子学院高等科2年

No one will be left behind.

これはSDGsの理念としてよく知られているスローガンです。リサーチや表敬訪問を通じて、この行動指針こそデンマークの理想像だと強く感じたため、WTO（世界貿易機関）の会議に臨むにあたり、これを目標としました。

そして会議本番のモデでは何度も発言の機会があり、議場全体に利益があることを強調して目的や政策を説明する事が出来ました。そのままアンモデでも、この目標を達成するべく情報共有や理解の徹底、他グループの状況把握など、日本では議場に必要の当然のものとして求められる行動を取ろうとしました。しかし、なかなか受け入れられず、私達は日本との大きな違いを感じたことがありました。その違いは意見の相違以前に、個人の判断基準となる根本的な価値観の差異によって生じたものです。その状況下で No one will be left behind. は必要とされていないのではないかと考える瞬間がありました。しかしながら、目の当たりにした価値観の違いに戸惑う中で次第に、今いる「世界」の舞台は、各々違う母国を持ち、文化、価値観において異なる人間が集う場だと気がつきました。そして自分もその多様性の中で日本出身のデンマーク大使として、「世界」を構成する一員だと自覚しました。国際大会だからこそ、自分の価値観で無意識のうちに重要視しているものがなぜ大切なのか、それを相手に説明する必要性を感じる事が出来たのだと思います。

「世界」での価値観の違いをマイナスに捉えず、逆に活かしていくには二つ重要な事があると感じました。一つは共通の現状に即した問題意識を持つことです。政策や提案は必要とされて初めて意味をもつと感じたので、共通の問題意識は必要不可欠だと思います。もう一つはタイトルにも書いた No one will be left behind. です。多種多様な価値観があるからこそ、世界を構成している73億人で、誰一人取り残さずに問題に向き合う必要があり、多種多様な価値観があるからこそ、共通して持つべき理念であると考えました。

今回の会議では、目標としていた No one will be left behind. が達成できたわけではありません。この目標は、今回はWTOの議場の大使内での話でしたが、実際は世界中の人々に対して実行するために存在する目標です。将来この理念に少しでも貢献できる女性に成長し、いつか本物の国連という「世界」の場に来られたらと思います。

リサーチや準備に費やした半年間は、多くの壁にぶつかりましたが、その度にペアと支えあいながら模擬国連に向き合う事ができた、大変充実した何にも代えがたい日々です。またデンマーク大使としてスケッチブックを片手に奔走した2日間は本当にあっという間でしたが、会議中も私達らしさを忘れずに全力を尽くせた事を嬉しく思います。全日本大会から国際大会を通じて出会った素晴らしい仲間へ感謝し、そして聖心の模擬国連活動の皆、シスター・先生方や家族、GCIの方々、世界大会に辿り着くまで支えてくださった全ての方々に心からお礼申し上げます。本当に有難うございました。



『「私なんか」から「私たちだから」へ』

山内 梨々花

聖心女子学院高等科2年



私にとって模擬国連とは、新しい世界への扉であり、自分自身と向き合う機会を与えてくれる場所です。「私たちだから」出来る模擬国連、を追求し尽くした国際大会では、多様な価値観から刺激を受け、自分の持ち味・弱みを踏まえて精神力を鍛える事が出来ました。

私たちは、世界貿易機関にデンマーク大使として知的財産の貿易に関する議場に参加しました。ゼロからのリサーチに、堂々巡りした政策立案と、会議準備では一筋縄でいかないことも多々ありましたが「デンマークならどう考えるだろうか」とペアと学校や互いの家、電話でも粘り強く向き合いました。他方で、最も苦しかったのは英語力を養うことでした。海外経験が全くなく、「私なんか」の英語力では通用しないのではないかと、とどんなに実践的な練習を積んでも底なしの不安に襲われました。そして「私なんか」という思いから他の分野に関しても自信を持たずに、会議当日を迎えました。

会議1日目は、デンマークとしての国益こそ守れたものの、私自身の会議行動は課題が残りました。運良くスピーチの機会を幾度か得られ、スケッチブックを使い視覚的に訴えた政策は議場で広く受け入れられましたが、ペアに頼りきりで、練習を重ねていたにも関わらず私からはほとんど発言できずに終わったのです。混沌としていたアンモデも、次々と早口の英語で展開される議論に耳が追いつかず、「私なんか」の提案は受け入れてもらえないのでは、と次第に受動的な行動ばかりを取ってしまいました。また、大使の雰囲気や議論・交渉のやり方に日本との違いを痛感し、大きく戸惑いました。1日目終了後に思い通りに動けなかった原因を考えました。周りの大使との価値観の違いや語学のハンデも一因として考えられましたが、根本の原因は「私なんか」と怖気付いていたことだと気付いたのです。私たちはペアを組んで3年目に入りますが、「いっぱい失敗して私たちらしくあろう」、というのが常日頃からの合言葉であり原点です。支えてくださった方々の姿が脳裏に浮かび、失敗を恐れず全力を尽くそうと決心しました。

気持ちを切り替えた2日目は、英語への恐怖心も消え、「私たちだから」こそデンマーク大使を演じられました。DR作成では私たちの政策が反映されるよう奔走しつつ、ホワイトボードを活用して議論の内容を全員が把握できるよう努められたと思います。閉会式の後、「あなた達のアイデア、とても良かったわ。」とフロントの方に声を掛けていただいた時には、1日目こそ価値観の違いに戸惑いましたが、彼らに私たちのやり方を理解してもらえ、この上ない喜びを感じました。

模擬国連に魅せられて以来ずっと憧れを抱いていた国際大会への参加は、私の模擬国連ライフにおいても、人生においても、ゴールではなく新たなスタートだと考えています。世界各国から集った高校生や切磋琢磨し合った派遣生とともに臨んだ閉会式の光景を思い出し、「私たちだから」こそできる方法で吸収したことを周囲に還元して参ります。最後に、今まで支えてくださった全ての方に御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

『派遣、そして模擬国連の大使としての経験を通して』

古賀 大陸

灘高等学校3年



高校一年生の夏に始めた模擬国連、その集大成として参加した国際大会。この大会は自分の中では二年前の全日本大会での敗北から自身の成長を試し、実感する機会でした。結論から言うと、賞という目標には届かなかったものの様々な面で成長を感じることが出来ました。この報告書ではこの二年間と国際大会を振り返りつつ、思ったことを書こうと思います。

模擬国連において必要とされる能力を一概に断定するのは難しいです。しかし、その中で僕は「共感」が大切なキーワードだと感じました。いうまでもなく大使は国益を達成するというの大きな目的であり、責任です。そのために自国の政策を売り込みます。しかし大使にとって他国の状況や政策というのは基本的に他人事ではなく、その中で共感の輪を広げることが極めて重要になってきます。国際大会において僕はこれに失敗しました。僕の言葉は届かず、僕達の政策は結局最後まで他の大使にとっては他人事だったのです。それが今回の会議における何よりの後悔です。だからこそ、相手にとっては他人事な政策や問題意識をいかに自分事として捉えてもらうかが何より重要だと確信をもって言えます。共感を生むために必要だと僕が思うものは以下の三つです。「論理と感覚」：政策が論理的に通っているかどうかはとても重要です。しかし、時には名前に一工夫を入れてみながら感覚的に捉えてもらうことが重要な時もあります。「やさしさ」：模擬国連は人と人が一緒になって行う活動です。相手に共感を求めることは同時に自分も相手を理解しようと努力する責任を生じさせます。「パーソナリティ」：模擬国連では一人間として多様な価値観・人格を受け入れる力そして自分自身が豊かなパーソナリティを形成することが求められます。

だからこそ模擬国連では、嫌でも自分を見つめ、新しい自分を開拓しなくてはなりません。これは精神的にも体力的にも辛く、勇気のいることです。僕自身も自分を見つめ直す過程でかなり苦しみました。しかし、その試行錯誤の過程でしかパーソナリティを変化させることは出来ません。自分を変えるのは極めて困難です。しかし間違いなく可能です。二年間を振り返って断言できます。我々は議場では国の代表ですが実際は高校生です。臆せず、機会を活用しましょう。

様々な国際問題は高校生が数日話し合ったところで到底結論が出るものではありません。ではなぜこのような解決困難な問題について話し合うのでしょうか。模擬国連では他国の大使と議論を交わし、協力して意見を決議案にします。そこには「他人事」だった国際問題を、「自分事」として現実味を持たせる効果があり、我々高校生が模擬国連において国際問題を話し合う意義はここにあると感じます。僕たちにとって国際問題が自分事となった状態も一種の共感が達成された状態だといえるのです。

今回の大会では正直悔しい思いをしましたが、模擬国連はやはり大好きです。福岡の田舎の中学校から来た少年に世界の舞台に立つ経験を、素晴らしい仲間との出会いを、そして成長のチャンスをくれたこの競技とコミュニティには感謝してもしきれません。この二年間、辛いこともありました。しかし、2年間を振り返ると今では模擬国連を続けていて本当によかったと心の底から感じています。今後はこの素晴らしいコミュニティから受けた数々の恩を少しでも返せるよう、そして豊かなパーソナリティを持つ真のグローバル人材に近づけるよう、再出発していく所存です。最後に、顧問の宮田先生、会議準備をサポートして下さった大学生の方々、二年間ご指導して下さった灘の先輩方、両親、そしてここまでお世話になった全ての方々に感謝を申し上げて僕の報告書とさせていただきます。本当にありがとうございました。

『新たな模擬国連との出会い』

藤川 直人

灘高等学校 2年

2019年5月7日から13日までの1週間、国際大会の派遣団として貴重な経験をさせていただきました。渡米前に立てた目標を達成できた反面、悔いの残ることも多くあります。私が参加した議場はWHO（世界保健機構）で、議題は”Mechanisms of Controlling Epidemics in Global Mass Gatherings（マスギャザリングにおける感染症対策）”でした。マスギャザリングとは、オリンピックやメッカ巡礼等、様々な地域の多くの人たちが集まる場のことです。現在のWHOでは、マスギャザリング主催国への助言や勧告、過去のデータを将来に活用するレガシービルディング等が感染症対策として行われています。

さて、会議初日、簡単な議題解説の後、会議が始まり、デンマークは会議の序盤でスピーチを行いました。「デンマークは、国際益を重視している。各国互いに協力し合おう」という内容のスピーチを行ったところ、膨大な数のメモが送られてきて驚きました。アンモデが始まるとメモを送ってきた国の一部が集まってきて、喜んだのもつかの間、ドイツとフランスが我々の言うことを一切聞かず、主導権を完全に奪われました。その後、グループ分割等様々な策を取るも状況を打開することはできませんでした。



2日目は方針を転換し、我々の政策をより多くの国に理解してもらおうとしました。しかし時すでに遅く、他のグループはDRの作成に必死で、政策の内容を議論できるような状態にありませんでした。最終的にデンマークはDR.5のスポンサー国としてDRを提出することができましたが、時間的制約により十分な説明時間が与えられず、結果として我々のDRは否決されてしまいました。以上が会議の大まかな流れです。

さて、日本の模擬国連と国際大会の両者を比較して、大きく異なることは、模擬国連の捉え方であると考えます。日本の模擬国連には国連議場の要素が強く現れています。ルールや文書フォーマットなどが厳格で、決議案文書を完成させることが重視されます。また、政策の妥当性の検証や、国際的な文書として効力を持つためにコンセンサスを目指す姿勢にも、国連議場としての側面が現れています。

それに対し国際大会では国連というよりも教育プログラムとしての認識が強いように思います。厳格な規則よりも、パブリックスピーキングやアイデアを出し合うといったことに焦点が当てられています。日本においてはアウト・オブ・アジェンダ（議論の対象外）とされる内容が議長に高く評価されることも多々あります。

来年以降、国際大会に派遣生として渡米される方にお伝えしたいのは「国際大会は日本の模擬国連とは異なる競技である」ということです。文化や知識量も異なり、自己主張だけをするような大使も多くいるような環境において、全日のような会議戦略では納得できる会議行動を行うことは厳しいです。それと同時に、「考え方に柔軟性を持つこと」を意識してほしいと思います。私が記したこの内容も、あくまでも私の議場ではこうであったというだけで、あなたの参加する会議では条件が大きく異なることもあるでしょう。突然の事象に臨機応変に対応するスキルを磨いていくことは、国際大会において大きな力となると思います。

最後になりましたが、本派遣事業に関してお世話になった方々には心より感謝の意を表したいと思います。このような貴重な経験をさせていただきましたことを心から嬉しく思います。ありがとうございました。



支援団体一覧

本事業の実施にあたり、多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます。

《後援》

外務省

文部科学省

国連広報センター

《協賛》

株式会社内田洋行



株式会社エヌエフ回路設計ブロック



学校法人河合塾



キックマン株式会社



株式会社公文教育研究会



GC&T (株式会社公文教育研究会)



株式会社講談社

おもしろくて、ためになる
講談社

ゴールドマン・サックス

**Goldman
Sachs**
Gives

株式会社 JTB

JTB
感動のそばに、いつも。

学校法人駿河台学園

駿台 SUNDAI
第一志望は、ゆずれない。

学校法人高宮学園 代々木ゼミナール

代々木ゼミナール
YGC
Y-SAPIX GLOBAL CAMPUS

一般財団法人凸版印刷三幸会

TOPPAN

トヨタ自動車株式会社

TOYOTA

株式会社ナガセ

東進ハイスクール・東進衛星予備校
東進ハイスクール

株式会社日能研

日能研

株式会社ニチレイ

ニチレイ

ブリタニカ・ジャパン株式会社



Global Learning Center
(ベネッセコーポレーション)



海外トップ大進学塾 Route H
(ベネッセコーポレーション)



お茶の水ゼミナール
(ベネッセコーポレーション)

Benesse® お茶の水ゼミナール
海外大併願コース

三菱商事株式会社



《協力》

日本航空株式会社



みらいふ



理想科学工業株式会社



《助成》

本事業は、下記の公益財団法人より助成金を受けております。



公益財団法人
渋沢栄一記念財団

公益財団法人
公文国際奨学財団

公益財団法人
三菱UFJ国際財団



協賛企業を代表して

日本航空株式会社（JAL）からのメッセージ

日本航空株式会社
旅客販売統括本部長 二宮 秀生

まず初めに全日本高校模擬国連大会を見事に通過され、日本代表として高校模擬国連国際大会へ出場された皆さま、誠におめでとうございます。

日本航空グループは、毎年国際大会に出場される日本代表の皆さまにご利用いただいております。本年度もニューヨークへご渡航される皆さまにお選びいただけたことを、大変光栄に思い、厚く御礼申し上げます。

毎年ご出発される学生の皆さまを拝見する度、現状に満足することなく常に向上心を持ち続ける姿勢に社員一同非常に感銘を受けております。

日本代表として高校模擬国連国際大会に出場することを目指し、この大会で最高の力を発揮するために多くの時間を費やし、辛い思いも経験しつつ、時には犠牲をも払って努力されてきたことと存じます。1つの目標に向かって全力で取り組み、世界各国の学生と様々な問題に向かい合い、議論し合うことができた経験は、誰にも真似することのできない非常に貴重な時間となったのではないのでしょうか。

今回の挑戦を経て自信をつけた方、世界の「壁」を感じた方などそれぞれ感じたものは異なることでしょう。一人ひとり胸の内に秘める思いは様々であると思いますが、努力された「過程」で培われたものが、皆さまの今後に大いに活かされるものとなることを心よりお祈り申し上げます。

日本航空グループは、「世界で一番お客さまに選ばれ、愛される航空会社」になることを目指すと共に、今後も高校模擬国連国際大会に参加される学生を応援し続けて参ります。末筆ではございますが、出場された学生の皆さまを始めこの度高校模擬国連国際大会に携わられた全ての皆さまのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。





公益財団法人アジア・ユネスコ文化センター（ACCU）からのメッセージ

国際教育交流部 岡野 晃一

派遣生ならびに引率教員の皆様、大変お疲れ様でした。また事業運営の中心となり進行役を担ったグローバル・クラスルーム日本委員会の皆さん、ありがとうございました。初日に予定していた中満国連事務次長との面会ができなかったり、会議本番でも、決議案まで辿り着けず途中で議場終了というハプニングがあったりしましたが、これも良い思い出として充実した1週間だったのではないのでしょうか。

今回、地域創生枠として選抜された岐阜県と愛知県の高校生が参加した初めてのプログラムでした。例年より10名近く多い、29名という大きな派遣団となったにも関わらず、ニューヨークで派遣団の訪問を快く受け入れてくださったILO、UNICEF、UNWomen、国連デンマーク政府代表部、国連日本政府代表部の皆様には心より御礼申し上げます。とりわけ、最初の訪問先となったILOでは、当初派遣生は緊張していた様子でしたが、数多くの質問に受け応えて頂くことで、次第に派遣生のスイッチが入り、終わってみれば30分の時間延長と二巡目の質問タイムに入るなど、その後の表敬訪問に続く非常に有意義な時間を過ごすことができました。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコの基本理念に基づき、相互理解の促進と持続可能で平和な社会の実現に資するため、様々な活動を行っております。なかでも、次世代のグローバル人材を育成する高校模擬国連推進事業は数多くの方々のご協力・ご支援によって成り立っています。派遣生の皆さんには、企業・団体・大学生・学校関係者・ご家族からの手厚いサポートのもと、全日本大会およびニューヨーク派遣に参加することができたことを忘れず、国際舞台で経験したことをご自身の将来に活かしていくこと、また次に続く中学生、高校生や地域に還元することを是非お願いしたいと思います。自分の中だけで留めて欲しくはありません。経験を踏まえて、今後自らどう動いていくべきかを自問自答しながら、周りを巻き込んで大きく羽ばたいて頂きたいと思います。また、今回引率教員8名中5名が初めての派遣プログラム参加でしたが、口々に「高校生でこのような機会が設けられることは素晴らしいし、羨ましい」「話には聞いていたが、これだけ中身の濃いものだとは思わなかった」と称賛のお声もいただきました。ですが、国際大会参加は始まりにすぎません。教員の方々においては、引き続き派遣生のバックアップを宜しくお願い申し上げます。

最後になりましたが、高校模擬国連推進事業の趣旨にご賛同頂き、ご協賛ご協力を賜る企業・団体の皆様には厚く御礼申し上げます。お蔭様で8校16名の高校生がニューヨークに派遣されただけではなく、数多くの高校生が模擬国連に携われることができ、多様性に富んだ国際社会を理解し、複雑な国際問題に興味を持ち、それを解決する案を考え自発的に行動に移す機会を得ております。今後の発展のためにも、引き続きご指導ご鞭撻賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。



編集・発行

グローバル・クラスルーム日本委員会
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

発行：令和元年 6 月